
Call

日下部利巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Call

【Nコード】

N7674Y

【作者名】

日下部利巳

【あらすじ】

事件解決後高木は本庁に連絡を入れる為に携帯を操作していた。短縮を検索して確認もせずにボタンを押してしまい、ディスプレイに“工藤新一 自宅”が表示されたのに気付いたのはすでにボタンを押した後だった。

高木は一瞬途方に暮れた。今電話を掛けている家の主人——工藤新——は目の前にいるのに。

そんな高木の耳に飛び込んで来たのはとんでもない音だった。

“ピッ”

「あ、間違えた」

本庁に連絡するつもりで携帯電話の短縮を検索して確認もせずにはボタンを押してしまった。

ディスプレイに“工藤新一 自宅”が表示されたのに気付いたのはボタンを押した後だった。

高木は一瞬途方に暮れたが、今電話を掛けている家の主人——工藤新——と偶然現場に來た新一の友人、黒羽快斗をかすめ見て、ま、いいかな、と思った。

この頃彼との連絡のやり取りは携帯電話にしているが、彼が携帯電話を持つ前まで自宅に連絡していた。殆ど自宅にいる事が多かったが、今の様に現場に呼ばれている時や家にいない時は留守番電話が対応してくれた。

電話口から聞こえてくる声は単調な口調だったが、事件でささくれた心を落ち着かせてくれたのを良く覚えている。

懐かしいな。

彼の留守番電話を聞かなくなってそんなに時間は経過していない筈なのに、もう随分昔の事のように思える。だから、つい懐かしくてそのまま電話を切らずにいた。本当は署に連絡して彼等を送らなければならぬのに。

3コール目で留守番電話に切り替わった。

確か出だしは『はい、工藤です。』だったっかな？

“プツ”

『犯人は、貴方ですっ！』

「は、はいっ!？」

談笑していた彼等が自分のすっとんきょうな声に振り向いたが、瞬時に固まった顔はどうしようもなくて。

彼等を仰視したまま凍り付いた高木の耳にどこかで聞いた事がある曲が流れてきた。

あ、これ。確か『名探偵コナン』のイメージソングだ。

近頃小学生はもちろん、中高生など若い女性達に何故か爆発的に

人気がある小学生向けの推理アニメだ。ちょっと前、警視庁が発表した麻薬撲滅のポスターに主人公が起用されたから良く覚えている。3歳になる姪っ子にそのポスターをせがまれたし。姪っ子は『名探偵コナン』の大ファンで、遊びに来る度にビデオを見せるからストーリーは良く知っている。

小学生の男の子が大人顔負けの推理で事件を解決していくだよね。

でも、実際そんなだったら警察形無しだなあ。

心の中で涙する高木の耳に電話の主、工藤新一の声が流れてきた。

『はい、工藤です。只今事件に取り組んでいるか読書中の為、電話に出る事が出来ません。お手数ですが、発信音の後にメッセージを15秒でどうぞ。』

“ピ——ッ”

「……………」

内容は、まあ、普段の彼を見れば（ちょっと変だけど）普通の内容だ。

けれど、アニメのオープニングに似せたあの軽い口調とバックミ

ユージックは普段の彼からは想像がつかない。

ぐるぐると頭の中が混乱していたら、回線が切れてしまった。

あ、しまったな。無言電話をしてしまった。そう思ったが、未だ思考と身体は固まったままだった。

「高木さん？どうかしたのですか？」

携帯電話を耳に当てたまま硬直している高木を心配して新一が寄ってきた。

不安げに自分を見上げる彼と、先程聞いた電話口の彼のギャップが激しすぎる。

それより、一体どんな顔して留守番電話を吹込んだのだろうか？

「高木さん？」

「あつ、その……。工藤君変わった留守番電話にしてるんだね」

「はあ？」

訝しがる新一の背後で快斗が遠目でも解る程身体を竦ませ、大慌てで高木の方に振り向いた。

「いや、僕さっき署に連絡するつもりが間違えて、工藤君家にかけてしまったんだ。そしたら、今までと違った対応してくれたから。」

「あれ？留守電変えてないんだけどなあ……」

首を傾げ、自分の携帯電話で自宅に掛ける新一。

それを見張りながら恐る恐る後ずさる快斗。腰が引けてるぞ。

「っ、はあ!？」

新一が高木と同じ様な反応をした時、快斗はさらに後ずさった。ハイスピードで。足音がしないのが不思議だ。

「……………」

始めは青ざめて携帯電話に耳を傾けていた新一だったが、だんだん赤味を帯びてきて耳まで真っ赤になる頃には目がすわっていた。

“ピッ”

無言で携帯電話を切った新一の迫力に高木も後ずさる。

現場に入った（特に真犯人を指摘する）時の気迫もすごいものを感じるが、今の新一は逆に指摘されて開き直った真犯人の様な物騒な顔つきをしていた。

見るとすでに快斗は新一に背を向けて、進入禁止の黄色いテープを跨いで現場を抜け出そうとしている。

その気持ちは解らなくも無いがどうしてそこまでして逃げるのか高木にはわからなかった。

「か——い——と——おっ！待ちやがれっ！！」

新一の声を聞いた途端、脱兎のごとく逃げ出した快斗の背中をサッカーで鍛えた黄金の足が直撃する。

「ぐええっ！」

「く、工藤君。いくらなんでも飛び蹴りは不味いんじゃないかな……」

警察官として暴力を止めなければいけないのは分かっているが、腕を組み、片足で快斗の背中を踏みしめている新一は怖いモノがある。

「快斗、どうして逃げようとしたのかなあ？」

「それは、死にたくないからデス」

「俺に殺されると判ってるんだったら、他人の家の留守電変えるなよ」

「だあ——って、暇だったんだもん。新一事件ばっかで俺かまってくれないんだもん」

「はあ、だからか。この頃変な録音ばっか入ってたのは」
「何が入ってた？」

「——無言電話か笑い声。……みんな永遠と笑い続けるんだ。」

「ぶっ」

「ぎゃははははっ」

「快斗……高木さんまで……」

「ごめん、ごめん。さっき僕も無言電話入れた口だからさ」

「因に笑い声が入ってたのは誰？」

「服部と博士と蘭と園子と毛利のおっちゃんと父さんと母さん。」

母さんなんて父さんの後すぐに入ってたから絶対父さんに聞いて面白がって聞いてたんだ。———何で誰も言ってくれなかったんだろう？」

首を傾げる新一に二人は目線を合わせた。

笑い声を入れた人達は多分留守番電話の声の主が誰かわかっていたから面白くて黙っていたのだろう。

そして無言電話を入れたのは人達は———恐れ多くて聞けなかったのだろう

餌のいらない大きな猫を飼っている新一に、大概の人間が騙されて一種のドリームめいたイメージを新一に持っている。

だから、運悪く快斗の留守番電話を聞いてしまった彼等は、脳が拒絶反応を起こして固まり、無言電話を入れてしまった後蘇生して、今さっき聞いた事を頭の中でリプレイをして、自分のイメージとのギャップに困惑し、きっとこれは何かの間違いだろうと勇気づけても、本人に問い詰めてそれが間違いでなかったら、ドリームが大音響を立てて崩れ落ちていくのが恐ろしくて———言えなかったのだろう。

「そりゃあ、」

「ねえ、」

「「工藤新一だからでしょう」」

(後書き)

こんな留守電欲しいです。
使いそうにないけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7674y/>

Call

2011年11月22日22時47分発行